

被災者の思い 未来へつなぐ

未来を考えるシリーズの4回目は、岩手県の事例を紹介して締めくくる。
(那須政治)

新聞と、これから



「復興教育」。岩手県の小中高校では、総合学習などで震災の教訓を土台とする学びが進められている。県教育委員会が作成した教師向けの副読本では、「郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育成するために、(中略)『いきる』『かわる』『そなえる』を育てること」と定義される。

盛岡市本宮小の古玉忠昭校長。今年十月に五年生への授業を予定する。題材に使うのは、震災から一カ月後の地元

名古屋市で3、4日に行われたNIE全国大会。来年は東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県で「盛岡大会」が開かれる。震災後に当地で育まれたNIEとはどんなものなのか。NIEの



新聞を使った「復興教育」を進める古玉忠昭校長。手にしているのは副教材「盛岡市本宮小で

経験伝え復興教育

来年全国大会の岩手

紙に載った記事。津波で自宅を失った楯ヶ崎小に通う姉妹が、地区役員の祖父を手伝う内容だ。姉妹は避難所に届く救援物資の弁当を竹かごに入れて、高台の住宅を回り配っていた。校長時代は妹が在校生だった。

記事には、転校してきた二人を温かく迎えた近所の人への恩返し気持ちは二人を動かすことあり、二人の心情や地域とのつながりの大切さを学んでもらう。

弁当を運ぶ理由を考えることも、避難所や仮設住宅に入らず被災した自宅に居続ける「在宅避難者」の話題につながる。

昨年五月には、高校三年になった姉が、震災後の五年間の歩みを振り返り、将来を語る記事も出た。こちらも授業で使用。古玉校長は「震災に負けず、夢や希望を持ち続けて前に進む姿勢も学んでもらいたい」と思いを込める。

命の尊さや備えの重要性などを呼び掛ける災害・復興報道は、NIEとの親和性が高いという。ただ被災県での実践には注意も必要だ。

私立花巻東高(花巻市)の夏井友也教諭(58)は、記事を読んで意見文を作成する授業を続ける。被災地出身の生徒それぞれが抱える気持ちに配慮し、震災の話題は「震災から〇年」「震災遺構として保存決定」など、節目のものだけを取り上げることになっている。それでも「またそういうの?」と被災した生徒から不快感を示されたことがある。

意見発表などを通じて、自分と異なる考えに接するものもNIEの良さだ。夏井教諭は「家が津波で流されたなど、当事者にしか分からない痛みもある」と、互いに意見を交わす大切さを指摘しつつ、「教師が『こうあるべきだ』と、一方的に総括、評価しないように気を付けている」と話す。

発展担う人材育成が課題

NIE全国大会盛岡大会は、「新聞と歩む 復興、未来へ」のスローガンで来年7月26、27日に盛岡市内で開かれる。

記念講演に、新聞の活用についての著書がある明治大の斎藤孝教授を招き、公開授業では、本会場とは別に、沿岸被災地の大槌町にある大槌学園(小中学校)でも授業をする。実践発表では、珍しい「小中高連携」の事例も報告される。

大会実行委員会事務局長の谷藤典男・岩手日報読者センター長(58)は「復興を担う人材育成が岩手の課題。岩手だからこそ示せるNIEの形を見せられるように準備したい」と話す。

新聞製作の過程 見学OK

中日新聞社は「新聞ができるまで」を知ることができる見学コースを設けています。担当者の案内で編集や印刷、

からと午後一時からの一日一回です。所要時間は九十分。パソコンで新聞作りを体験するコースもあります。●中 日新聞社総務部見学係 電話 052(221)0578



新聞とわたし

野球が好きなので、幼稚園の年少の時から毎日、新聞を読んでいました。



加藤瑞丸さん

記憶に残った稲田防衛相辞任

新聞を読んでいると、最新の知識が手に入ります。最近気になったのは政治のニュースです。稲田防衛大臣や民進党の蓮舫代表が辞任した記事が記憶に残りました。去年から、中日新聞のことも記者を始めました。新聞記者の仕事が面白そうと思ったからです。メモを取るのには難しく、いろんな質問を用意しなければならぬのは大変ですが、取材で人の話を聞くのは勉強になります。面白かったです。(愛知県春日井市南城中一年)